HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第一次大戦とヒルファディングの帝国主義論
Author(s)	上条, 勇
Citation	北海道大學　經濟學研究, 26(3), 139-175
Issue Date	1976-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31352
Type	departmental bulletin paper
File Information	26(3)_P139-175.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第一次大戦とヒルファディングの帝国主義論

上条　勇

はじめに
Ⅰ　ヒルファディングの政治的立場
Ⅱ　帝国主義「必然性」論争
Ⅲ　帝国主義＝崩壊論批判
Ⅳ　超帝国主義論の萌芽
Ⅴ　戦時経済と組織された資本主義
結びにかえて

はじめに

これまでのわが国におけるヒルファディング研究は,『金融資本論』の学問的業績を高く評価する半面，概してそれ以後のヒルファディングについてはあまり検討する意義を認めないような傾向をもっていた。そのせいか，研究の関心は，彼の社会化論などのわずかな例外をのぞいて，ほとんど『金融資本論』の内容と成立史に集中してきたといってよい。

しかし，帝国主義論史の問題関心から，わたしはこのようなヒルファディングの取り扱いには，つぎのような疑問を感ずる。

第一に，ヒルファディング研究を,『金融資本論』の内容と成立史の範囲内にとどめることは，一面では『金融資本論』じしんの正しい解釈を妨げるのではなかろうか。とくに『金融資本論』が帝国主義論としてもつ特徴を読みとるとき，のちの情勢変化に彼の理論がどこまで有効であったかを，ヒルファディングじしんにそくして明らかにする必要があるように思われる。

第二に，ヒルファディングは第一次大戦後に，いわゆる組織された資本主義論を唱えるわけだが，この理論の形成過程を彼の諸論稿にそくして検討することが，組織された資本主義の真の内容と意義を究明するうえで，重要だ

といえないだろうか。

第三に，ヒルファディングの独自な資本主義発達史観は,「ロシア型」の社会革命とは一線を画した，先進国ドイツの革命への志向に結びついており，彼のいわゆる社会化論と経済民主主義論を生みだしてゆく。したがってもう一度ヒルファディングにもどり，高度に発達した資本主義国の変革にかんする彼の見解を取り上げることは，現在のわれわれにとって大きな意味をもつのではないか，と考えられる。

わたしは，帝国主義論史にヒルファディングを正しく位置づける際には，第一次大戦前，戦中，戦後における彼の理論の継起性あるいは発展性を示すことが不可欠な作業だと思う。本稿では，このような視角から，さしあたり第一次大戦時におけるヒルファディングの帝国主義認識を検討する。

I　ヒルファディングの政治的立場

戦時中，ヒルファディングは，祖国擁護を唱えて自国政府に戦争協力を申し出た各国社会民主党指導部の態度を批判し，戦争にたいして社会主義者は中立的立場をとるべきだと主張した[1)]。彼は社会民主主義右派の「祖国擁護」論を,「戦争原因の公的半官的な表明の神聖化」あるいは「帝国主義イデオロギーによる社会民主主義イデオロギーの駆逐」とみなした。そして帝国主義戦争を聖戦にまつりあげるような種々の帝国主義イデオロギーにたいして積極的な批判を加えていった。ところがこのなかで,『金融資本論』では比較的めだたなかった彼の帝国主義論の重大な欠陥が露呈し，ヒルファディングはついには自由貿易主義と超帝国主義ひいては組織された資本主義を唱えるにいたったのである。

ここではまず，ヒルファディングがどんな立場から帝国主義イデオロギーを批判したのかを明らかにする意味で，戦時中における彼の政治的見解を検討しておきたい。

(1)

「われわれマルクス主義者は，帝国主義政策によって資本主義的対立が大

きな戦争の破局にかりたてられることを予見し，その原因を明らかにした[2]」とヒルファディングは戦時中のある論文でのべている。しかし戦争勃発と同時に，各国の社会民主主義政党は，祖国擁護に踏み切ったのであり，それとともに第二インターナショナルは崩壊した。社会主義運動は混乱状態におちいり，帝国主義戦争のまえにその無力さをさらけだしたのである。

ヒルファディングはその理由を，大衆がショーヴィニズムの興奮にとられ，「戦争阻止の『大衆行動』は戦争がひとたび勃発するや，ありそうもな[3]」かったということにもとめた。そして，われわれは大衆に幻想をいだいていたのであり，じつは大衆じしん戦前すでに日和見主義化していたとのべた。1890年代中頃からの資本主義の繁栄は，労働者階級の資本主義への適応傾向を強めた。右翼日和見主義者は，このような労働者階級じしんの日和見主義化を基盤として，その勢力を拡大し，「戦争が日和見主義者に予期せざる勝利をあたえ」たというわけである[4]。

ヒルファディングは，1914年８月４日の事件，すなわち帝国議会での，社会民主党（以下ＳＰＤ）議員団による戦時公債承認に抗議した一人であった[5]。彼は二年後に，戦争勃発の当初少数の戦争反対派が党指導部の決定に従ったのは，戦争が短期間に終るだろうと考え，党の統一と団結の維持そして戦後の大任務にたいする備えに関心をよせていたからだとのべている[6]。おそらく彼もその一人であったのにちがいない。ところが戦争が長びくにつれて，党指導部の帝国主義への加担が露骨になり，社会主義の将来にとって危険になった。

ヒルファディングは，党指導部の背任を，「８月４日の賛成から８月４日の政策にな」った[7]と表現している。「指導部と党機関紙の大部分は，ＳＰＤ議員団の声明がそっていた線に一歩一歩譲歩していった。……さらに党内において党の原則とその戦術の基盤にたいする攻撃がますます激しくなった[8]。」すなわち党内右派は，戦争――検閲と戒厳状態――を利用して，「社会主義的原則の空洞化」をはかったのである。「党の立場はかくて８月４日以来根本から変わってしまった。党は外部から脅やかされることなく，その組織と機関紙の

存在は安泰である。党はその外形においてではなく，内部骨格，その民主主義・社会主義および国際主義的性格にかんして危険にさらされている。その肉体ではなく，魂の損傷の危険に脅やかれている。社会民主党を改良主義的労働者党に変えようと努力する諸勢力はますます熱心に仕事にかかっている。」[9]

ヒルファディングは，社会主義運動が日和見主義者と少数の反戦派との対立によって二分されたと考える。「この対立を否定し，戦時中の政策が一時的なエピソードにすぎなく，戦争とともに克服されるものでその結果古い戦術への復帰の邪魔にならないと語る人々は，この対立の意味と大きさにかんして自他を欺いている。」[10]かくてヒルファディングは，少数派の側にたって，社会民主主義右派にたいする批判を開始するわけである。

ＳＰＤの諸機関紙は，８月４日を境にして，それまでの戦争反対の態度を急転換し，一斉に祖国擁護を書きたて始めた。[11]この傾向は1915年はいると一層露骨になり，パウル・レンシュの『ドイツ社会民主党と世界戦争』[12]やハインリッヒ・クノーの『党の崩壊？』[13]などのように，祖国擁護と城内平和を理論的に正当化するこころみも現われるようになった。この二つの小冊子にたいして，カウツキーがただちに「再考を要する二書」[14]という論文を書き，これに反論を加えたのは周知のことである。ヒルファディングも，ほぼカウツキーの側にたって，クノーやヴィルヘルム・コルプにたいする論戦を始めている。ただ彼は，カウツキーが祖国擁護を認め，８月４日の事件にかんしてＳＰＤ議員団の行為を弁護したのにたいして，[15]祖国擁護と戦争協力を唱える党指導部には批判的であった。が，カウツキーとのこの相違にはふれず，むしろそれをあいまいにした形で，論戦をおこなっている。

概してヒルファディングの右翼多数派批判は，あまり迫力のあるものではなかった。たとえばコルプとの論戦は，まったく精彩を欠いたものであった。ヒルファディングは，露骨に城内平和およびＳＰＤの改良主義政党化，ＳＰＤとブルジョア政党との連合政策を薦めるコルプにたいして，ブルジョア政党はＳＰＤと提携するよりは，みずからの陣営の相互接近を望む，とかたづけたにすぎなかった。[16]レーニンはヒルファディングのこのような態度にたい

して，つぎのような酷評を加えている。

「カウツキー派のルドルフ・ヒルファディングは,『ノイエ・ツァイト』誌上で，コルプにまったく迫力のない回答を与え，もっとも重要な点について沈黙をまもり，ドイツ社会民主主義者のあいだの統一はただ『純形式的なもの』にとどまった，というコルプの正しい証明について，泣き言をならべている。[17]」

つまりヒルファディングは，日和見主義者による帝国主義支持，戦争協力，城内平和におけるプロレタリアートの政策的独自性の方棄，ＳＰＤの改良主義政党への転化をもくろんだ行動を，社会主義の将来にとって危険なものと認めながら，その日和見主義批判を徹底しなかった。彼のつぎのような発言はそれを端的に表現している。

「正常な関係に復帰したならば，党は……自由な雰囲気のなかで，根本をつくした討論のすえに決定された政治戦術によって，すべての同志を編入しうるであろう。……われわれは今もなおつぎのことを疑わない。党とその指導部内での深い対立は，プロレタリアートじしんによって，民主主義と社会主義的理念をめぐる斗争の更新と深化の過程で克服されるであろうことを。[18]」

社会民主主義右派にたいするヒルファディングのこのような不徹底な態度は，じつは，彼の「日和見主義」論に深く根ざしたものであったといってよい。

(2)

ヒルファディングの「日和見主義」論の特徴は，一般的にいって大衆の日和見主義化を強調するところにみられる。彼のこの傾向は，すでに大戦前において示されている。彼は当時，修正主義の発生基盤を，1890年代以来の資本主義の繁栄によって生じた大衆の体制順応傾向に求めたのであり，帝国主義政策がもたらす物価騰貴や重い租税負担の圧迫により，大衆の意識が急進化するにしたがって，修正主義もその影響力をうしない，ついには消滅するとのべていた。[19] 大衆の日和見主義化の強調は，その後もつらぬかれ，とくに戦後革命の総括，相対的安定期における彼の経済民主主義論において，重要

な意味をもつことになる。

ところで大衆の体制順応傾向をとくことはそれじたいとしては誤まりでなく，むしろそれを明確に強調したことは，彼の「日和見主義」論のメリットをなすものであったといってよい。だが，メリットはただちにデメリットに通じている。ヒルファディングには，大衆の日和見主義化を語ることによって，労働運動の指導者たちの日和見主義，すなわちその階級的裏切りを免罪する傾向があった。つまりヒルファディングは彼らにたいしてつぎのように期待したのである。

「労働者階級は彼らが行動しなければならないように行動している。」[20]やがて戦争が終り，革命的情勢がやってくるならば，大衆は革命的に行動するだろう。それともに右翼日和見主義者はその支持基盤をうしない，もとの戦列に復帰せざるをえないだろう，と。

ヒルファディングは，右翼日和見主義者のこの過程を保障し，ひいては党の原則的立場と統一を維持する基盤として，少数反対派の勢力増大を考えていた。この少数反対派とは，戦争反対ということでのみ共通点をもつにすぎない，修正主義者，中央派，急進的左派の野合集団であった。周知のようにこれらの集団は，1917年4月にゴータにおいて，ドイツ独立社会民主党(USPD) を結成することになる。ヒルファディングは，この少数反対派につぎのような特徴づけをあたえている。

「反対派内部での区別を戦前の時代からの諸対立と等置することは，まったく誤っているだろう。当時急進派を不和にしたところのものは，大衆の行動準備の程度にかんする見解の相違であった。この問題を，戦争は大衆の行動性を活発にすることによって，意味のないものにした。それゆえわれわれは，われわれをマルクス主義中央派と特徴づけ，他の反対派諸グループと対置させることを拒否する。」[21]

われわれは，これと類似した見解を，戦前のヒルファディングに見いだすことができる。1910年のＳＰＤマグデブルク党大会にむけた一論文において，ヒルファディングは，当時生じた党内諸対立の激化に対処する意味で，急進

主義者と改良主義者を統一するマルクス主義政策という見解を示して，彼のマルクス主義中央派としての立場を明確にした。[22] 1912年のケムニッツ党大会の時点では，彼は，党内対立が解消されたとして，自分らをマルクス主義中央派と特徴づけることに反対した。[23] そして，現在，右派左派といった分派ではなく，たんなる意見の相違があるにすぎないと語った。[24] 大戦前夜のヒルファディングは，政治的には終始党執行部の立場にたっていたのであり，結局，党の規律と統一を維持する――実際にはエーベルト執行部体制の確立を意味するのだが[25]――ことに満足した。

戦時中，ヒルファディングはこれと同じようなことを繰り返そうというのである。彼は少数反対派諸グループの統一と強化を，社会主義運動の分裂を回避する唯一の道であると考えていた。党の統一ということがヒルファディングにとって至上の任務であったのであり，彼の右翼日和見主義者にたいする批判の不十分さも，このことから説明される。彼には労働貴族論がなかった。すべてを大衆の日和見主義化のせいにする傾向があり，このことは，彼が指導者の人格上の問題をとやかくいう筋合はないと語るときに，如実に示されている。

ヒルファディングは，結局，他の多くの社会民主主義的指導者たちと同様に，社会革命において指導者がはたす重要な役割を不十分にしか認識せず，さらには宣伝や教育以外に社会主義政党の指導的役割をあまり認めなかったのであり，大衆の自然発生的運動に歴史の発展を期待し，そしてゆだねる傾向があったといってよい。これがヒルファディングの日和見主義批判の限界をなしたのであり，戦後のドイツ革命における彼の役割を一面では規定したのである。

つぎにわれわれは，ヒルファディングのクノー批判をとりあげ，クノーの帝国主義・「必然性」論にたいして彼がどのような歴史観を提示し，そしていかに城内平和や戦争協力を否定していったかを検討したい。

1) Hilferding, Ein neutraler Sozialist über die sozialistische Neutralität, in: Der Kampf, 8. Jg. 1915, S. 272.

2) Hilferding, Um die Zukunft der deutschen Arbeiterbewegung, in : Die Neue Zeit (以下 NZ.), 34. Jg. Bd. 2, 1915/16, S. 167.
3) Hilferding, Historische Notwendigkeit und notwendige Politik, in : Der Kampf, 8. Jg. 1915, S. 209.
4) Hilferding, Arbeitsgemeinschaft der Klassen?, in : Der Kampf, 8. Jg. 1915, S. 321.
5) W. Gottschalch, *Strukturveränderung der Gesellschaft und politisches Handeln in der Lehre von Rudolf Hilferding*, 1962, S. 17. ゴットシャルヒ『ヒルファディング——帝国主義とドイツ・マルクス主義——』(保住敏彦・西尾共子訳，ミネルヴァ書房，1973.) 5ページ。
6) Hilferding, Der Konflikt in der deutschen Sozialdemokratie, in : Der Kampf, 9. Jg. 1916, S. 11.
7) Hilferding, (Anm. 2) S. 168.
8) Hilferding, (Anm. 6) S. 12.
9) a. a. O., S. 13～14.
10) Hilferding, (Anm. 4) S. 321.
11) ローザ・ルクセンブルク『社会民主党の危機』選集3，現代思潮社，1969，215～220ページを参照。
12) Paul Lensch, *Die deutsche Sozialdemokratie und Weltkrieg*, Berlin, 1915.
13) Heinrich Cunow, *Partei=Zusammenbruch*? Ein offenes Wort zum inneren Parteistreit, Berlin, 1915.
14) Kautsky, Zwei Schriften zum Umlernen, in : NZ., 33. Jg. Bd. 2, 1915, S. 33～42, S. 71～79. クノー批判を扱った部分は，カウツキー『帝国主義論』(波多野真訳創元文庫，1953) 第2章において訳出されている。
15) カウツキーのこのような態度は，戦時中における彼の多くの論文にみられるが，ここではとくに，Die Sozialdemokratie im Kriege, in : NZ., 33. Jg. Bd. 1, 1914/15, S. 1～8. をあげておく。
16) Hilferding, Die Sozialdemokratie am Scheidewege, in : NZ., 33. Jg. Bd. 2, 1915, S. 489～499. W. Gottschalch (Anm. 5) S. 154～155. 邦訳 143～144ページ。
17) レーニン「ヴィルヘルム・コルブとゲオルギー・プレハーノフ」全集22巻，162ページ。
18) Hilferding, (Anm. 6) S. 15.
19) Hilferding, Mit gesammelter Kraft, in : NZ., 30 Jg. Bd. 2, 1911/12, S. 1002～1004.
20) Hilferding, Sozialistische Betrachtungen Zum Weltkriege, in : NZ. 33. Jg.

Bd. 2, 1915, S. 840.

21) Hilferding, (Anm. 2) S. 167.

22) Hilferding, Der Parteitag in Magdeburg, in : NZ. 28. Jg. Bd. 2, 1909/10, S. 892～900.

23) Hilferding, (Anm. 19) S. 1004.

24) Hilferding, Das, Was war, in : NZ. 31. Jg. Bd. 1, 1912/13, S. 168～172.

25) 安世舟『ドイツ社会民主党史序説』御茶の水書房，1973，第4章を参照。

Ⅱ　帝国主義・「必然性」論争

ハインリッヒ・クノーは,『党の崩壊？』(前掲) のなかで，ＳＰＤの戦争協力をつぎのように正当化している。帝国主義は歴史的必然だから，社会主義者はそれに従い協力しなければならない。

クノーのこのいわゆる「必然性」論は，当時かなりセンセーショナルな論議を呼び，多くの社会主義者たちがこれに反論を加えている。ヒルファディングは，1915年の論文「必然性と必然的政策」において，「必然性狂信論者」クノーを批判している。その場合，彼はつぎのような歴史観によっている。

「……全歴史的経過は必然的に，その内実が窮極的には経済的諸関係によって規定される格闘，そして相互に敵対するイデオロギーの格闘として現象する。[26]」歴史はこのイデオロギーの正否を決定するではなく，折々のそれらの力関係における強さを確認するにすぎない。これまで歴史は事実上，支配階級のイデオロギーが,マルクス主義のみならず,社会民主主義一般のイデオロギーより強かったということを判定した。しかし力関係は絶えず流動するものであり，一度敗北したイデオロギーが将来勝利するのを否定することはできない。*

＊　ここでヒルファディングが使用しているイデオロギーとは，社会的な利害関係や生活要求に根ざした意識諸形態一般をさしており，彼によれば政策がイデオロギーの重要な意味内容を占めている。[27] 歴史の発展をイデオロギーの格闘によって説明するヒルファディングのこの見解は，のちに，社会主義イデオロギーあるいは理念が大衆の心をつかむか否かに社会変革の主要条件をもとめて，労働者階級に社会主義精神を注入することを大きな課題として設定した，彼の経済民主々義論

に結びついてゆく。

さてヒルファディングはこのような観点から，歴史はつねに正しいというクノーの命題を批判している。彼はまず歴史においては正否の価値判断がなりたたず，原因と結果の連鎖があるにすぎないとことわっている。が，クノーの表現をもちいてつぎのようにのべている。「歴史はつねに政策にたいして正しくない。すなわち古い歴史は，政策が既存の生成物を克服することによって――もちろんその基盤のうえでだが――形成する新しい歴史にたいして，いつも正しくないのである。」[28] 歴史的必然は，不断に変化する「移行的必然性」を示すにすぎない。

クノーは，プロレタリアートに歴史に従うように推奨している。しかし「一般にプロレタリアートが，今日その行動において，……資本主義が社会主義にとって成熟するまで帝国主義を承認し，それから突然承認を解約し，社会主義にむかうべきだとするのはまずい想定である。というのは社会主義はまさしく歴史的必然性としての資本主義の絶えざる拒否，絶えざる否定をめざした不断の闘争においてのみ実現しうるものであるから。」[29]

ヒルファディングは，このように，必然性に拝跪して戦争協力や城内平和を唱えるクノーを批判している。これは，城内平和や祖国擁護を条件つきで認め，このような観点から帝国主義の「必然性」論を批判するカウツキーの態度とは，一見異なっている。が，ヒルファディングじしんはその点を明確にせず，むしろカウツキーがのべた，必然性とは将来についてではなく現在と過去の事実関係にのみ妥当するものであり，また行動主体にとって必然性の規準がその必要性のいかんによってあたえられるという見解[30]，さらにはマックス・アドラーの同様な見解[31]を積極的に評価している[32]。これは，政治的立場において，ヒルファディングが結局彼らと大差なかったということによるものだろうか。

表面的にみれば，ヒルファディングの主張は，戦時中における階級闘争の継続の必要性を認める点では，帝国主義の必然性にたいして社会主義をめざしたプロレタリアートの反乱の歴史的必然性を対置するローザ・ルクセンブル

クや[33]，帝国主義の必然性から階級闘争によるその克服の可能性をみちびきだすブハーリン[34]の見解に近いようにみえる。しかし階級闘争と反帝闘争の具体的内容において，ヒルファディングはローザら急進派と大きく隔たっている。彼は，カウツキーを中心としたマルクス主義中央派の立場から，帝国主義にたいして平和政策を対置したのであり，ローザらのように反帝闘争を，直接社会主義の実現をめざした闘争に結びつけようとはしなかった。そして結局のところ，各国の反戦諸勢力の強化と「敗者も勝者もない」講和協定を各国政府に強要するところのインターナショナルの再建に，その全希望をつないだのである[35]。ヒルファディングのこの見解は，戦時中における彼の帝国主義認識と密接に結びついているといってよいが，これについてのたちいった考察は，本稿の第4節に譲ることにしたい。

ところでヒルファディングは，クノーの「必然性」論がじつは崩壊論に立脚しているとして，つぎのようにのべている。

クノーが，社会主義を実現するにはまだ経済的に未成熟であり，将来はちょとのあいだ資本主義に属するという「ドグマ」を告げたとき，崩壊論におちいっている。彼はかってノイマンがのべたように，全世界が資本主義化されたときにはじめて資本主義が「破産する」という見解をいだいているように思われる。

クノーのこの見解にたいしてヒルファディングはつぎのように批判する。クノーは社会主義の実現に必要な社会の成熟度を示すメルクマールをなんら明らかにしていない。クノーによれば，あたかもヨーロッパとアメリカにおけるプロレタリアートの勝利は，最後の小ネグロ国が資本主義的生産を始めるか否かにかかっているようである。それは「経済的宿命論」であり，「ひとつの腐敗した政治的静観主義，純改良主義にみちびく」ものにすぎない。

「われわれじしんは『金融資本論』において，もろちん，一時期に多くの理論家の見解を支配していたいわゆる経済的崩壊論がいかにばかげたものであるかを証明する労をとった。われわれの見解によれば，マルクスは『資本論』第二巻において，資本主義生産過程が絶えず拡大された段階で——時折繰り

返し克服される恐慌によって中断されるが――続行されることについて，適切な証明をおこなっている。プロレタリアートが社会主義実現のために期待せねばならない資本主義の経済的自殺――それによれば待機期間は部分的改良で満たされるのだが――，そのような資本主義の自己否定は存在しない[36]。」

ヒルファディングは，崩壊論にかんする彼なりに理論的に深めた考察を，1916年の『ノイエ・ツアイト』誌上の連続論文「商業政策上の諸問題[37]」においておこなっている。そしてこの崩壊論批判において，彼の帝国主義論の欠陥が表面に浮かび上がってくるのである。

26) Hilferding, (Anm. 3) S. 209.
27) Ebda.
28) Ebda.
29) a. a. O., S. 213.
30) Kautsky, (Anm. 14) S. 112～116. 邦訳，51～61ページ。
31) Max Adler, Was ist Notwendigkeit der Entwicklung?, in : Der Kampf, 8. Jg. 1915, S. 173～177. *Prinzip oder Romantik?*, Nürnberg, 1915.
32) Hilferding, (Anm. 20) S. 842.
33) ローザ・ルクセンブルク（註11）276ページ。
34) ブハーリン『世界経済と帝国主義』著作選3，西田勲・佐藤博訳，現代思潮社，1970，211～218ページ。
35) Alexander Stein, *R. Hilferding und die deutsche Arbeiterbewegung*, Gedenkblätter, Hamburg, 1946, S. 9.
36) Hilferding, (Anm. 3) S. 210.
37) Hilferding, Handelspolitische Fragen (1—7), in : NZ., 35. Jg. Bd. 1, 1916/17, S. 5～11, S. 40～47, S. 91～99, S. 118～126, S. 141～146, S. 206～216, S. 241～246. なおこの論文の編別構成などについて簡単に紹介したものとして，倉田稔『金融資本論の成立』青木書店，1975，第3章第3節がある。

Ⅲ　帝国主義＝崩壊論の批判

(1)

ヒルファディングは，前掲の連続論文「商業政策上の諸問題」において，つぎのような帝国主義イデオロギーを批判の対象としている。

(1)　『労働組合戦争教本』において展開された，戦争がなによりもドイツにたいするイギリスの貿易上の嫉妬に起因するという見解。

(2)　自国の国民経済の発展が他国の経済発展によって脅やかされるという危惧をいだいて，あらゆる必要にたいして自給自足経済を作ることをめざしたアウタルキー思想。

(3)　シュマッハーにみられるように，戦争を有利な通商条約（領土の併合を含む）締結のための暴力的手段とみなす見解。

(4)　アウタルキー思想にもとづいたプロパガンダで，最初はドイツを頂点とした中央ヨーロッパ諸国の経済政策的共同体の形成をめざし，戦争の進展とともにオーストリー＝ハンガリー帝国，トルコ，ドイツ三国の関税同盟へと矮少化をへた中央ヨーロッパ構想。[38]

これらにたいしてヒルファディングは,『金融資本論』に依拠して，現在の戦争が産業資本主義諸国間の競争ではなく，金融資本の政策たる帝国主義の暴力的決戦に起因しているのであり，アウタルキー思想などは，金融資本の帝国主義的膨張政策をイデオロギー的に反映したものにすぎないと批判を加えている。そしてこの批判のなかで,『金融資本論』で展開した彼の「帝国主義」論を簡潔にまとめているわけだが，これについてはここでは割愛する。ただこの点についてひとつだけ注意しておきたいのは，この時期にヒルファディングが,「発展した資本主義諸国のあいだで，植民地領域の再分割をめぐって戦争が勃発した[39]」と明言していることである。この，帝国主義戦争を世界の再分割闘争と規定する見解は,『金融資本論』にも大戦前夜における彼の諸論文にも見られなかったものである。

ところでローザ・ルクセンブルグも戦時中世界分割の完了と世界の再分割について語っている。[*46)] ヒルファディングとローザの戦前における帝国主義認識の共通の特徴は，世界分割の最終局面に生じた，帝国主義諸国間の未分割地域争奪戦から，戦争の「必然性」をみちきびだしたことにある。彼らの見解のこのような変化は，おそらく他国の領土併合の動きがめだった当時の国際情勢によって説明されるといえるだろう。しかしヒルファディングにしろ

ローザにしろ，こういった世界の再分割の問題が，彼らの帝国主義論においてどのように位置づけられるのかという根本的な問いを発することはなかった。この問題は，レーニンの『帝国主義論』においてはじめて解明されることになる。

＊　注目すべきことに，ローザはこの時点では，帝国主義を「資本の世界的発展の一定の成熟段階の産物」[41]と規定する一方，ドイツ帝国主義の出現を説明する場合，「資本蓄積の，特徴的な，独自な，二つの形態」として，独占と金融資本について言及している[42]。そして帝国主義的諸現象の多くを，独占と金融資本にかんするこの規定によりつつ説明しているのである。

さて，われわれは，ヒルファディングの帝国主義イデオロギー批判を検討した場合，彼の帝国主義論のつぎのような側面が前面に押しだされているのに気づく。それは，均衡論および景気循環論的な性格をもつ彼の恐慌論[43]に依拠した経済的崩壊論の否定と，それとの関連で展開された，自由貿易にもとづく国際分業に世界市場の調和的発展をみる見解である。とくに後者は，『金融資本論』においてつぎのようにのべられていた。

「発達した資本主義的生産にあっては，全世界市場を単一の経済領域にむすびあわす自由貿易が，もっとも大きな労働生産性ともっとも合理的な国際分業とを可能にする[44]。」

この見解は，上述の恐慌論の性格と結びついて，戦時中には，ヒルファディングの自由貿易主義と超帝国主義論の萌芽を生みだしていくことになる。以下われわれは，この点に多少たちいった検討を加えることにしたい。

(2)

ヒルファディングは，さきにあげた種々の帝国主義イデオロギーの根底には，つねに崩壊論が横たわっていると考える。そしてこれらの帝国主義イデオロギーをふりまわして帝国主義戦争を支持するものたちにむけて，崩壊論批判をおこなっている[45]。

ヒルファディングはまず崩壊論につぎのような一般的規定をあたえている。

つまり崩壊論とは，過少消費説にもとづき，国内市場の狭隘化にたいして世界市場の絶えざる拡大の必要をとくもので，世界市場の完成，非資本主義諸国の資本主義化，農業国の工業国化とともに訪ずれる旧工業国の輸出の困難から資本主義の経済的破局を見とおす理論である。

つぎに彼は，かかる崩壊論のおおざっぱな学説史的検討に移っている。その場合注意すべきことに，彼は，重商主義から古典派やシスモンディをへてマルクスにいたる経済学説史を崩壊論をめぐる形で，かなり強引に整理している。たとえばイギリス重商主義の父トーマスマンのつぎのような見解を崩壊論と特徴づけている。すなわち突然の外国による食糧供給のストップから生ずる経済的破局を予測して，農業を犠牲にした工業製品輸出の発展に警告を発し，工業よりも農業を重視するといった見解である。このような見解がどうして崩壊論に属するのかは，ローザ・ルクセンブルクやパルヴスら急進的左派の見解に崩壊論の代表を見いだすわれわれの考えからすれば，あまり判然としない。が，ヒルファディングのこの見解は，戦時中流行したアウタルキー思想や中央ヨーロッパ構想を批判するうえで，ひとつの重要な基礎をなしているのである。

ところでヒルファディングがその崩壊論批判の中心にすえたのは，シスモンディの過少消費説にたいする批判である。というのは彼は，種々の崩壊論の理論的底流には，つねにシスモンディのこの理論があると考えたからである。シスモンディは，過少消費説にたって，文明化した世界全体がひとつの市場を形成し，もはやあたらたなる国民に顧客を見いだせない瞬間がやってくるにちがいないとのべた。また彼の過少消費説は，販売不能となった商品の過剰と貧困および失業の並存という現象を説得的に説明するものであったから，「資本主義制度のもっとも鋭い告発者」になった。その現実にたいして説得性をもった理論は，ドイツにおいて変形された形で，ロートベルツスによって普及され，講壇社会主義者のもとで，しばしば受け入れられた。のちになって社会主義者がそれを代表し，単純にマルクス主義学説として発展させることになった。

さてヒルファディングは，このシスモンディにたいする批判を，マルクス自身によって語らしめるという形でおこなっている。古典派は，販売と購買の統一のみをみて，その矛盾をみない。「古典派とは反対に崩壊論は，この矛盾について……需要と供給，生産と消費が問題となるや，販売と購買との内的統一を看過する。」[46]マルクスの恐慌学説は，この二つの偏向を止揚し，恐慌と資本主義的生産過程の循環の必然性について，実際的科学的洞察を可能にしたのである。永遠の恐慌は存在しないとマルクスはのべたが，同様に持続的崩壊も存在しない。「マルクスの資本主義的生産過程の分析は，したがって崩壊論を教えるものでないばかりか，この経済的崩壊論の不合理を暴露している。」[47]恐慌は周期的にそして絶えず拡大する生産の基盤のうえに，資本主義的発展の螺旋的進行を描くのである。

ヒルファディングは，大衆の過少消費については，それを「恐慌の一般的諸条件」のひとつであり，生産の拡大にたいして硬直的な限界を示すものではなく，蓄積過程の進展につれて引き延される弾力的な限界を意味するものだとのべている。ところが，周知のように『金融資本論』において，大衆の過少消費は恐慌の一般的な一条件とみなされる一方，商品の過剰生産と同様過少消費という表現が経済的にはなんの意味ももたず，生理学的な意味をもつにすぎないとして，きわめて消極的な位置づけしかあたえられていないのである。[48] ヒルファディングは，結局,「すべての現実の恐慌の窮極的根拠」である，生産力の発展に比しての大衆の消費制限を理解しなかったといえる。

さてヒルファディングの以上の見解は，確かにシスモンディの過少消費説を批判するうえでは一定程度有効であったといえよう。しかしローザ・ルクセンブルクやパルヴスら急進的左派の崩壊論は，単純にシスモンディの過少消費説と同一視できるものではなく，マルクスによってあたえられた「すべての現実の恐慌の窮極的根拠」にかんする彼らなりの理解をもとにして生まれた資本家的蓄積の歴史的傾向の一展望なのである。パルヴスは，資本蓄積の発展傾向が不可避とする資本の過剰に種々の帝国主義的諸現象の基本的原因をもとめた。ローザの場合には，蓄積にまわされる剰余価値部分の生産物

をだれが消費するのかという形で，崩壊論の問題が提起されたのである。資本蓄積の歴史的発展傾向の解釈のいかんによって，崩壊論の種々の潮流が生まれる。この点でシスモンデイの過少消費説に崩壊論を代表させて検討するヒルファディングの崩壊論批判は，決して水準の高いものであったとはいえない。

ローザらの崩壊論は，「すべての現実の恐慌の窮極的根拠」としてのべられた生産力の発展に比しての大衆の消費制限を，その歴史的傾向において，一面的に理解したものである。それにたいしてヒルファディングの場合，彼の恐慌論の性格からいって，逆に，再生産の均衡条件の強調から，資本主義の歴史の調和的な発展を予測する側面も一面ではもっていたといってよい。事実ヒルファディングは，その帝国主義イデオロギー批判において，彼の均衡論および景気循環論的な性格をもつ恐慌論を，直接的に世界資本主義の議論にも適用して，世界市場の調和的発展を描くのである。

(3)

ヒルファディングは，種々の帝国主義イデオロギーに反論する場合，帝国主義が金融資本の領土拡張政策であるという彼の「帝国主義」論をそれに対置して超越的に批判する一方，それらの「まったき不条理を明るみ」にだすという内在的批判も企てている。この内在的批判は，崩壊論にもとづいた世界資本主義の発展の見とおしの誤まりを浮き彫りにするという意図をもってなされたが，それは以下にのべるように，逆に世界市場の調和的発展を展望する，彼の帝国主義論の大きな欠陥をあらわにするのである。

ヒルファディングは，世界市場の発展の見とおしをつぎのように明らかにしている。

「個々の国民経済内部において，ある産業部門の発展は，他の産業部門の発展の前提条件である。そしてこの過程は，資本主義の内部において，それと必然的に結びついた恐慌にもかかわらず，より拡大された段階での再生産を意味する。これと同様に一国の国民経済の工業発展は他の国のさらなる発

展にとっての条件である。」[49]

これは，彼の恐慌論の均衡論および景気循環論的な見解を，国際的領域へ適用したものとみてよく，一見セーの「販路の理論」をも思わせる叙述である。

ヒルファディングはこのような観点から，非資本主義領域の資本主義化が資本主義の破滅をもたらすという崩壊論を否定している。彼は大胆にも，確かに「帝国主義政策の前提条件は経済的政治的に未発展で後進的な領域の存在である」とのべる一方，「たとえ全世界がほとんど均等に資本主義的に発展したとしても資本主義は依然として可能である」と明言している。[50]

さて世界市場の調和的発展にかんするヒルファディングの見解は，アウタルキー思想を彼が批判する場合に，比較的まとまった形で展開されている。彼は，アウタルキーの努力が，資本主義の世界資本主義化への発展傾向の現実を無視したものであると，世界貿易にかんする種々の数字をあげて批判している。そしてアウタルキー思想の根底には，経済領域の概念にかんする不明瞭な認識があるとして，「すべての発達した資本主義的産業にとって，今日，経済領域は世界市場である」[51]とのべている。

「そのような諸産業の発展は，あらかじめあるいは一定の時点で，国内原料の制限からの解放を要求する。その供給の増大は，世界経済の国際編成を意味する。同時にそのようなものとしての原料や補助材料の輸出は，輸出国の購買力の形成を意味し，したがって生産一般の拡大を意味する。世界市場への志向は，すべての資本主義的産業の発展にとって固有のことである。その生産の拡大，競争と技術的進歩によって強要された生産の拡大衝動は，資本主義的産業をして，その販路の絶えざる拡大，したがって対外市場の探究にかりたてる。他方，世界市場の存在は，諸産業にたいして，偶然的で多かれ少なかれ狭隘な国内市場の需要とは独立に，生産を技術的に急速に調整する可能性をあたえる。資本主義的技術的発展と世界市場の創造は，相互に条件づけあっている。」[52]

ヒルファディングが，ここでたんに，世界市場の存在およびその拡大が，

資本主義的な生産力の急激な発展の必要条件であったということ，あるいは発展した資本主義的産業が今日世界市場むけに生産をおこなっているということをいうにとどまるならば，それは正しいだろう。しかし彼はそれを，彼のつぎのような見解の一環としてのべているのである。

第一に，各国の工業発展と世界市場の関係を，国内市場と同一の次元で，たんに生産が消費を生むといったふうにかたづけている。

第二に，各国民経済間の関係を，生産性と技術的観点から一面的にとらえた国際分業関係としてのべている。ヒルファディングは，この観点から，アウタルキー思想をつぎのように批判している。「かくて，世界市場からの離反とアウタルキーへの復帰は，生産諸力がたっした発展の後退を意味するであろう。」「自足性ではなく国際分業の強化」が将来にとって重要なのだ。[53]

第三に，資本主義的諸産業が世界市場むけに生産するということのみでなく，世界市場を経済領域として措定するとのべている。ヒルファディングは，さらにすすんで，「国内（国家的に境界づけられた）市場は，経済的カテゴリーというより政治的カテゴリーであるといいうるかもしれない」[54]とのべている。彼によれば，保護関税は，世界を単一の経済領域に結び合わせる資本主義の発展傾向にとってひとつの障害をなすのである。このことから次節で検討するように，彼は自由貿易を主張するといってよい。

確かに，マルクス・エンゲルスものべているように，資本主義は歴史的に長期的にみて，多少の停滞諸傾向をともなうにしろ，その世界化傾向をつらぬくといってよいが，ヒルファディングのように，この傾向にかんして，生産性および技術性の観点からみた国際分業，あるいは生産が消費を生むという見解を一面的に強調するのは誤まっている。ヒルファディングは，崩壊論の一面性をただす一方，逆の一面化におちいっている。

またわれわれは，生産と資本の世界的集積の過程が各国民経済間の経済的連関を緊密化し，資本の高度な国際的展開をともなう一方，つぎのような傾向をも生みだすことも忘れてはならない。すなわち帝国主義の時代においては，単純に貿易関係に規定された資本主義の世界的拡大傾向をのべることが

できなくなり，独占と金融資本の支配が，のちにレーニンが指摘したように世界経済の「寄木細工的な現実」[55]を持続的に形成する傾向をもたらすのである。

それにたいしてヒルファディングは――同じことは多かれ少なかれカウツキー，ローザ・ルクセンブルク，オツトー・バウアー[56]らにもいえるのだが――帝国主義の時代においては，むしろ資本主義の世界化傾向が促進されると考えている*。そしてまさしく帝国主義戦争のまっただなかで，世界市場の調和的発展という見解を明らかにしたのである。この見解はしたがって，レーニンによって「カウツキー的見解」と特徴づけられるのに[57]十分であった。われわれはつぎに，ヒルファディングが彼の帝国主義論のこういった欠陥から，いかに自由貿易主義や超帝国主義を唱えるにいたったかを考察する。

＊　ヒルファディングは『金融資本論』において，資本輸出や植民地政策を，資本主義の腐朽と寄生性との関連からではなく，後進的領域に資本主義を移植して，それを本国の工業製品の販売市場化あるいは原料基地化し，国内市場の一環にくみこむものとして明らかにしている。すなわち彼にあっては金融資本の経済政策たる帝国主義は，資本主義の世界化を促進するものであったのである。なおヒルファディングのこの見解は，相対的安定期には，彼をして「社会主義的植民地政策」を正当なものと認めさせることになる[58]。

38) 中央ヨーロッパ構想にかんするヒルファディングの議論については，Gottschalch, (Anm. 5) S. 157～159，邦訳146～147ページを参照。
39) Hilferding, (Anm. 3) S. 212.
40) ローザ・ルクセンブルク（註11）251ページ。
41) 同上，249ページ。
42) 同上，181ページ。
43) これについては，高山満「ヒルファディング恐慌論の基本構造(1)<序説>」（『東京経大学会誌』(27) 1960. 4) 46～53ページを参照。
44) ヒルファディング『金融資本論』林要訳，国民文庫，(2) 229ページ。
45) Hilferding, Handelspolitische Fragen, (Anm. 37) (1) Zusammenbruchstheorie S. 5～11.
46) a. a. O., S. 9.
47) Ebda.

48) ヒルファディング(註44) (2) 111～113ページ。
49) Hilferding, (Anm. 37) S. 45.
50) a. a. O., S. 120.
51) a. a. O., S. 124.
52) Ebda.
53) a. a. O., S. 125.
54) Ebda.
55) これについては，嶺野修「コミンテルンと世界経済論(1)」(北大『経済学研究』24 (4) 1974. 12) 307～309ページを参照。
56) オットー・バウアーは，たとえば『金融資本論』が参考文献としてあげた論文「Proletarische Wanderungen」において，「個々の経済領域の資本主義的世界経済への編制」の傾向を展望し，その一部分的現象として移民をもとにした国際労働市場の形成をのべている（in : NZ., 25. Jg. Bd. 2, 1906/07, S. 477)。
57) レーニン『帝国主義論ノート』全集39巻，581ページ。
58) Hilferding, Krieg, Abrüstung und Milizsystem—Drei Beiträge zum Abrüstungsproblem, in : Die Gesellschaft, 3. Jg. Bd. 1, S. 390.

Ⅳ　超帝国主義論の萌芽

周知のように，戦時中カウツキーは,「帝国主義国家間の神聖同盟」あるいは「国際的に結びついた金融資本による世界の共同搾取」といった超帝国主義の可能性を唱えた。彼は，帝国主義を資本主義の必然的段階とみなす見解を批判する意味で，帝国主義について，高度に発達した産業資本主義の「一産物」あるいは「政治的諸活動の特別なる一種」,「金融資本の好んでもちいる政策」,「超過利潤を獲得する一方法」という多様な規定をあたえた。そしてこれをもとにして超帝国主義の可能性を提唱したわけである。*

ところで帝国主義にかんするカウツキーの諸規定は，結局,「帝国主義＝政策」という見解に帰着する。帝国主義を政策あるいは政治的表現とみなす見解は，当時の社会主義者のあいだでかなり流布されていたもので，ヒルファディングも『金融資本論』において帝国主義を金融資本の政策と定義している。だが，彼の帝国主義規定は，カウツキーとはことなり，金融資本にとって客観的必然的な政策を意味していた。ところが注目すべきことに，戦時中

ヒルファディングもまた，自由貿易政策や超帝国主義をとなえて,「帝国主義＝政策」論の欠陥を露呈してしまうのである。このように戦時中,「帝国主義＝政策」論は,「マルクス主義を日和見主義と和解させようとする」意味でもちいられ，ヒルファディングもその傾向からまぬがれることができなかった。カウツキー批判の書として帝国主義論史に登場したレーニンの『帝国主義論』が,「帝国主義＝段階」論をとなえたのも，このような事情をふまえてのことだろうと考えられる。以下われわれは,『金融資本論』と比較しつつ，戦時中におけるヒルファディングの自由貿易政策と超帝国主義にかんする見解を検討することにしたい。

＊　カウツキーの超帝国主義論は，彼の平和主義的見解と密接不可分の関係にあったように思われる。

戦争勃発時，カウツキーは戦争が比較的短期間に終ると考え[59]，まもなく実現するであろう平和協定の性格とそれにたいする社会民主党の対応についてあれこれ模索し始めたのであった。たとえば1914年8月末の論文「平和の準備」においてカウツキーは，戦後には国際軍縮や関税連合をともなった平和協定が締結されるべきだと主張した[60]。

カウツキーは大戦前夜，平和の維持こそ社会主義の勝利にみちびく確実な保障だとのべ，そして平和的帝国主義の可能性をすでに唱えている[61]。戦時中においても彼は，社会主義の実現が平和の条件下でなされるという考えから平和協定の実現を強く期待したのであり[62]，また平和が資本主義にとってノーマルな状態だという考えから，戦争は短期間で終ると展望した。

カウツキーのこの見解のうちにすでに彼が超帝国主義論を唱える主要動機が含まれていたのである。のちの帝国主義にかんする諸論文は，この動機にもとづいた超帝国主義の理論化のこころみである。

戦時中ヒルファディングは，帝国主義にたいするプロレタリアートの政策として自由貿易をかかげた。そしてカール・レンナーによって自由貿易主義者ヒルファディングというレッテルをはられたのであった[63]。これはもちろん『金融資本論』における彼のつぎの見解と相違している。

「金融資本の経済政策たる帝国主義にたいするプロレタリアートの答えは，自由貿易ではありえない。社会主義でありうるのみである[64]。」

われわれは，ヒルファディングの見解がなぜ変化するにいたったのか，そのわけを問わなければならないだろう。

戦時中ヒルファディングは，帝国主義について，「帝国主義とは金融資本の拡張政策にほかならず，ひとつの商業政策である[65]」という規定をあたえている。帝国主義がひとつの商業政策であるならば，プロレタリアートはそれに別の商業政策を対置できるはずである。かくてヒルファディングは，つぎのように考えるにいたる。保護関税によって世界を分割することが帝国主義の諸矛盾の基底にあり，金融資本がこの保護関税政策しかとりえないとすれば，プロレタリアートは，世界の平和的でかつ合理的な発展を保障するものとして，自由貿易を対置しなければならない。というのは「帝国主義が，繰り返し戦争を意味する[66]」とすれば，自由貿易は，まさしく諸国家間の対立を緩和するだろうから。「今や諸国民は，この（帝国主義――引用者）政策を戦後も続行するかそれともそれと手を断切るかといった二者択一のまえにたたされている。相互的に不可分な関係にある保護関税，植民地および軍備政策の続行か，それとも強権政策との訣別か[67]！」

この二者択一のもとでは，「プロレタリア的商業政策の任務は経済の国際的編成を促進することに[68]」ある。「従来の敵対的外国にたいする遮断と闘争ではなく……経済および政治領域のできるだけの接近が社会民主党のスローガンでなければならない[69]。」

ヒルファディングの自由貿易政策の要求は，じつは，前節で明らかにした彼のつぎのような見解と結びついている。すなわち，「すべての発達した資本主義的産業にとって，今日，経済領域は世界市場であり」，自由貿易こそが本来ならばこれに相応したものであるという見解である。自由貿易は，最大の労働生産性ともっとも合理的な国際分業を約束するのである。ヒルファディングは，戦時中の崩壊論批判において，世界市場の調和的な発展の可能性をのべており，その結果として，彼の帝国主義論が，たとえ金融資本の時代であろうとも，自由貿易さえ実現されれば，資本主義の平和的発展が可能となるというような理論構造をもっていたことを，明るみにだしたといってよい。

この時点では，われわれは，彼が帝国主義戦争を生みだした諸悪の根源が保護関税にあると考えていたというふうに受けとれなくもない。

われわれは以上のことから，戦時中におけるヒルファディングの自由貿易政策の要求が，帝国主義を政策と規定し，そして自由貿易をもっとも生産性のある合理的な国際分業を約束するものだと考える，『金融資本論』においてすでにあたえられていた見解を，ベースとしていたことに気づく。この見解は，『金融資本論』では比較的めだたない形でのべられていたが，戦時中崩壊論批判との関係から全面的に強調され，その延長線上に自由貿易政策の要求を生みだしていったといってよい。

したがって，戦時中におけるヒルファディングの自由貿易主義は，『金融資本論』から180度転換したものではない。これはつぎのことからもいえる。すなわち『金融資本論』において，自由貿易は，プロレタリアートの「なんら積極的要求ではない」とされながらも，「保護関税にたいする防衛」としては一応認められていた[70]。戦時中，ヒルファディングは，これが積極的要求に転化したと考えた。ヒルファディングのこの変化は，おそらくつぎの事情から説明されるだろう。

戦前，帝国主義に社会主義を対置することは，帝国主義戦争へと突進する資本家階級にたいして，ひとつの牽制として意味づけられていた。そしてヒルファディングは，ドイツでは資本主義の発展が二階級の力関係のぎりぎりの均衡状態をもたらしているという意味で，社会主義の前夜にいたっていると考えていた[71]。ところが戦争が勃発したとき，ＳＰＤ内の日和見主義が勝利し，労働者大衆もそれにしたがったのであり，国際社会主義運動は分裂状態におちいった。労働運動がかかる脆弱性をみせたまさしく同じときに，一方で国家権力のとほうもない強化がもたらされた。この国家権力の強大化について，ヒルファディングは，1915年の論文「社会主義的中立にかんする中立国の社会主義者」においてつぎのようにのべている。マルクス・エンゲルスの時代には，戦争→国家権力の弱体→革命におけるバリケード戦という図式が成立した。しかし今日，「われわれは，国家権力が最高に堅固な時代の端初」

を目のまえにしている。かかる時代では，われわれにとって有効なスローガンは，平和の要求である。[72]*

＊　アレクサンダー・シュタインによれば，この論文を公表するわずかまえに，ヒルファディングは，戦争から内乱へというスローガンをかかげたレーニン・ジノヴィエフのテーゼ草案を手にして，「これはまじめに受けとれるしろものではない」[73]と評価している。

ヒルファディングは，このような事情のもとでは，帝国主義に社会主義を一般的に対置することはあまり効果がないと考えたようである。そのかわりに彼は平和政策と中立政策を掲げたのであり，その一環として自由貿易政策をうちだしたといえる。自由貿易政策をスローガンとした彼の目的はつぎのことにある。

第一に，戦後における社会革命に備えて，労働者階級が帝国主義戦争に加担したという印象からまぬがれるために，「プロレタリア階級の政策の独自性」[74]を強調する。これは社会民主主義右派の戦争協力と城内平和にたいして一線を画す意味で重要である。

第二に，労働者階級の物質的利害を集約した政策のもとに，帝国主義の重圧下に苦しむ「各国のプロレタリアートを統一する」[75]。

とくに後者についてみれば，ヒルファディングは，労働者階級のつぎのような物質的利害あるいは商業政策上の利害から，自由貿易政策を主張した。①生活資料の騰貴に反対。②高度に労働力を吸収する産業，すなわち完成品産業や消費材産業の発展。③国内市場の発展。

保護関税は，ことごとく労働者階級のこの利害に相反している[76]。したがって大戦下の生活難に苦しむ，「労働者階級の物質的利害から……自由貿易政策の問題が，これまで以上に重要である。」[77]ヒルファディングがここにあげたプロレタリアートの三つの商業政策的利害は，じつは『金融資本論』においてものべられているもので[78]，戦時中には，自由貿易政策をかかげる根拠として全面に押しだされたのである。

ヒルファディングは結局，戦時中に，労働者の商業政策の独自性を強調し，

また国際プロレタリアートの統一を回復して，平和を実現する，もっとも有効な政策として，自由貿易をとなえたといってよい。そしてこのような平和主義的な観点から，「労働者階級は，帝国主義的商業政策に断固として反対し，これに自由貿易を対置しなければならない[79]」とのべた。

「帝国主義が資本輸出を要求するならば，われわれは賃上げによる国内市場の拡大を要求する。帝国主義が国家権力を独占の目的に奉仕させることを要求するならば，われわれは……民主化を要求する。帝国主義が諸国家の対立をますます激化させるのならば，われわれは自由な諸国民の同盟にむかっての諸国家の連合を要求する。[80]」

ヒルファディングの以上の引用に，戦時中における彼の反帝闘争のすべてが集約されているといって過言ではない。結論的にいえばヒルファディングは，戦時中労働者階級を直接社会主義に導くことが最重要の課題となっているまさにそのときに，平和主義的観点から帝国主義的商業政策か自由貿易政策かという二者択一を彼らのまえに提起したのである。これは，ヒルファディングが社会主義実現のための具体的方策として強調するにもかかわらず，結局，平和的帝国主義を要求することを意味している。すなわちヒルファディングの自由貿易主義は，いわゆる超帝国主義に直結しているのであり，実際に，彼はカウツキーとは若干違った意味で超帝国主義の可能性について，つぎのようにのべている。

戦後においても「確かに金融資本の帝国主義政策への傾向は存在する」が，それに反対する別の諸傾向が強くなるのを忘れてはならない。「資本の拡張政策は，その（反対諸傾向の――引用者）強制下で別の形態，たとえばその影響領域の一種の割当制（Rayonierung）をとるか，プロレタリアートが政治権力の所有にいたり，それを自己の利益を貫徹させるために行使するか[81]」に終る。

また別のところでヒルファデイングは，戦後の一つの方向として，超帝国主義をつぎのように明らかにしている。

「帝国主義の闘争にかわって，未開発か後進的な市場を共同にその影響下

におく，諸国家的資本権力（Staatlichen Kapitalmächte）と諸資本主義的国家権力（Kapitalistischen Staatsmächte）の政治的経済的協業が出現するだろう。集積は急速に前進し，自由貿易は国際的分業を急速に発展させ，同時に国民的カルテル・トラストにかわってますます国際的カルテル・トラストが生み出される。」[82]

このヒルファディングの超帝国主義論の特徴は，簡単にいえば，つぎのようにまとめることができる。第一に，それは社会主義との二者択一の形で提出されており，プロレタリアートが戦後に社会主義を実現しえなかった場合に到来する。第二に，それは，金融資本によって自発的に採用されるというより，むしろ帝国主義にたいする反対諸傾向，とくに戦後政治的影響力の増大したプロレタリアートによって強要された形であらわれる。

ヒルファディングの超帝国主義論は，つまるところ，前節と本節で指摘してきた彼の帝国主義論の諸欠陥が総括的に表現されたものであり，戦時においてはまだ萌芽的にふれられたにすぎなかったが，後年の彼の「現実的平和主義」論の素地をなすものであったといえる。

ところでヒルファディングの超帝国主義論は，じつは戦時中においてはじめて明確な形をあたえられた彼の組織された資本主義論の一環，すなわち世界経済論の領域として唱えられたといってよい。われわれはつぎにヒルファディングの組織された資本主義論を検討することにしたい。

59）Kautsky, Der Krieg, in : NZ., 32. Jg. Bd. 2, 1913/14, S. 843 ff.

60）Kautsky, Die Vorbereitung des Frieden, in : NZ., 32. Jg. Bd. 2, 1913/14, S. 876 ff.

61）阪上孝「ドイツ社会民主々義の歴史観 ——カウツキーと帝国主義——」(『講座マルクス主義』7巻，河野健二編日本評論社，1969）第一章と大野節雄「カール・カウツキーと急進派——1912年軍縮論争をめぐって——」（『経済学論叢』20(3)1972）を参照。

62）Kautsky, (Anm. 60) S. 876.

63）Karl Renner, Wirklichkeit oder Wahnidee?, in : Der Kampf. 9. Jg. 1916, S. 16.

64）ヒルファディング（註44）(2)335ページ。

65) Hilferding, (Anm. 37) S. 243.
66) a. a. O., S. 98.
67) Hilferding Phantasie oder Gelehrsamkeit, in : Der Kampf, 9. Jg. 1916, S. 59～60.
68) Hilferding, (Anm. 37) S. 241～2.
69) Hilferding, Europäuer, nicht Mitteleuropäer, in : Der Kampf, 8. Jg. 1915, S. 363.
70) ヒルファディング（註44）(2)333ページ。
71) Hilferding, Parlamentarismus und Massenstreik, in : NZ., 23. Jg. Bd. 2, 1904/05, S. 808～809. Der Revisonismus und International, in : NZ., 27. Jg. Bd. 2, 1908/09, S. 166.
72) Hilferding, (Anm. 1) S. 267.
73) Hilferding, (Anm. 35) S. 9.
74) Hilferding, (Anm. 37) S. 99.
75) a. a. O., S. 243.
76) a. a. O., S. 96～97.
77) Hilferding, (Anm. 69) S. 362.
78) ヒルファディング（註44）(2)331～332ページ。
79) Hilferding, (Anm. 37) S. 243.
80) a. a. O., S. 246.
81) Hilferding, (Anm. 3) S. 212～213.
82) Hilferding, (Anm. 37) S. 245.

V　戦時経済と組織された資本主義

戦争は戦時統制経済をもたらし，戦時統制経済は資本主義の枠内でのぎりぎりの生産の社会化と計画経済化をもたらした。ドイツの戦時統制経済の中枢をなしたのは，プロイセン陸軍省内の戦時原料局（KRA）である。これは全ドイツの原料統制機関であり，実質的にはＡＥＧやゲゼルキルヒェン，ディスコントゲゼルシャフトなどに代表されるドイツ金融資本に支配されていたといってよい。KRA の商業的活動を代位したのは「戦時会社」(Kriegsgesellschaften) で，これらの会社は戦時統制の執行機関であり，かつまた国家によって支持された強制カルテルにほかならなかった[83]。このように戦時中ドイツは典型的に「国家独占資本主義」的に組織された。

さてヒルファディングは，戦時中において，この戦時統制経済にかんする本格的な分析を残していない。しかし戦時統制経済がヒルファデイングにあたえた影響は大きく，これを契機にして彼は組織された資本主義論を明確に唱えはじめるのである。

ところでヒルファディングが組織された資本主義論を唱えたのとほぼ同じ時期に，ブハーリンが『世界経済と帝国主義』(1915) を著している。ブハーリンのこの著書は，レーニンの『帝国主義論』が戦時統制経済にほとんど触れていないのとは対照的に，戦時統制経済を念頭において書かれたのである。

それは「経済生活の国際化」と「資本利害の国民化」との関係において，国家資本主義トラストの成立が資本主義のあらゆる矛盾を世界経済に追いやった結果として，世界経済における無政府性の激化をとき，国家資本主義トラスト間の闘争といった形で帝国主義戦争を解明する，ブハーリン独自の理論構造をもっていた。だが他方で，国民経済の組織化を説明する場合には，ヒルファディングの『金融資本論』をかなり踏襲していたといってよい。ブハーリンは，金融資本概念にかんするヒルファディングの定義をそのまま受け入れている[84]。彼が個々の産業部門の組織化，金融資本の鉄鎖によるその国民経済的規模における結合の産物として，金融グループと国家を頂点とした国家資本主義トラストを展開する場合，ある意味でそれは『金融資本論』において展望されていた「金融資本の完成形態」*をより具体的かつ明快な形で展開したものであったといえる。ブハーリンはさらに，より高次な生産関係の展開を意味する「国家資本主義」をのべて，「戦時社会主義」の幻想を打ちくだき，戦時統制経済の理論化をくわだてている。だが，ブハーリンが明らかにした「国家資本主義」論は，国家によって組織された資本主義論にほかならず，事実上『金融資本』論が萌芽としてもっていた傾向を，戦時統制経済を組みこむ形で発展させたものにほかならない。

＊　ヒルファディングは『金融資本論』の終章で，「金融資本は，その完成形態においては，資本少数政治の手における経済的政治的絶対権の最高段階を意味する[85]」と

のべている。ヒルファディングは概して,「社会経済の組織化の問題」を解決するという観点から，金融資本を明らかにしている。彼によれば金融資本は，その傾向からいえば，生産の無政府性を排除し,「生産にたいする社会的管理の樹立」をもたらす。そして「それが完成される時には，それの発生した培養土からひきはなされ」,「適対的形態で意識的に調整される社会」をむかえるというわけである。[86]

このように『金融資本論』のもっていた欠陥ははからずもブハーリンによって浮き彫りにされたといってよいが，戦時中ヒルファディングじしん,『金融資本論』体系をみずから発展させた結果として，組織された資本主義論を明らかにしていた。

ヒルファディングは，1915年の論文「諸階級の労働共同体？」においてはじめて「組織された資本主義」という言葉を使用した。彼のこの組織された資本主義論は，偶然にそして軽い気持でもって展開されたのではない。戦時中,「ドイツ労働運動の将来をめぐって」(1916),「商業政策上の諸問題（7)」（前掲）の二論文においてもそれにかんする言及があることから，ヒルファディングにとってかなり重要な位置を占めていたといって言いすぎではない。ヒルファディングは，戦時中における国家権力の異常な強化，戦時統制経済における強力な資本の集積・集中をみて，組織された資本主義の現実的可能性を明白に意識したといってよいだろう。彼は上述の論文「諸階級の労働共同体？」においてつぎのようにのべている。

「高度資本主義的発展の最新の段階は，おのずからほかの保守化傾向を生みだした。1890年代中頃以来の世界資本主義の急速な発展は不況期間を短縮し，年を追って失業を緩和した。資本主義のもっとも発展した国々――ドイツと合衆国――は，このときいらい少しも古い意味での産業予備軍を知らず，農業・工業を問わず継続的に……外人労働力の供給を必要とした。金融資本――少数巨大銀行による独占的に組織された産業の支配――は生産の無政府性を緩和する傾向をもち，無政府的資本主義から組織された資本主義的経済制度へ転化する胚種を含んでいる。金融資本とその政策が生みだした国家権力のとほうもない強化は同じ方向に作用する。社会主義の勝利のかわりに，

組織されてはいるが，支配の存在する非民主主義的に組織された経済が可能であるように思われる。その頂点には資本主義的独占と国家の連合した諸力がたち，その下層には，生産の官吏として階級的構成において勤労大衆が活動する。資本主義社会の，社会主義による克服にかわって，大衆の直接的物質的欲望をこれまで以上に改善する組織された資本主義といったひとつの適応した社会が現われる。」

ヒルファディングは，戦争が――プロレタリアートによる民主主義的反作用を捨象するならば――この傾向を強めるにすぎないとのべている。さかんに宣伝されている「戦時社会主義」*は，じつは組織の力による資本主義のとてつもない強化を意味する。そして強固な国家権力とその財政的基盤（国家独占）が，組織された資本主義への傾向を促進する。

＊　ヒルファディングは，1914年4月の論文「組織権力と国家権力」において，国有化あるいは国家独占の議論について，つぎのようにのべている。「国家社会主義（Staatssozialismus）はプロレタリアートの掌中に権力を獲得させる政治的変革の後に可能であるにすぎなく，プロレタリアートはその場合に社会主義を制約なく実現しうるのである。今日ここかしこで国家社会主義と命名されているものは，この名称を不当に使っているのであり，家際には最悪の国家社会主義である。」[88]

ところでこの時期におけるヒルファディングが唱えた「組織された資本主義」は，「資本主義的独占と国家の連合した諸力」という表現にみられるように，いちじるしく国家資本主義的色彩が強い。事実，彼は，組織された資本主義を「組織された国家資本主義」とも表現している。これは戦時統制経済における国家権力の異常な強化の強烈な印象によるものだろうと考えられる。*が，概してヒルファディングの組織された資本主義論は，経済における国家の役割の増大を強調するところにその特徴をもっているといってよい。彼は相対的安定期においては，民主国家論を基底にすえて組織された資本主義論を展開している。

＊　この時期においては，国家資本主義あるいは国家独占資本主義にかんする論考が多い。ブハーリンについてはさきにのべたとおりである。レーニンも1917年を中

心とした諸論文において，あきらかにエンゲルスの国有化規定を念頭におきつつ，国家資本主義あるいは国家独占資本主義に断片的に言及している。レーニンは，戦時中の国家独占資本主義を，社会主義の物質的準備としての生産の社会化が資本主義の枠内でぎりぎりまで進められた段階，げんに直接に死滅しつつある資本主義の最後の姿態と特徴づけた。

カール・レンナーは，1916年の連続論文「マルクス主義の諸問題」のⅢを中心にして，戦時統制経済の一般理論化を企てている。この論文において彼は，「国家的に規定された，徹底国家化された組織」構造をもつ「組織された私的経済の時代（Epoche）」の到来を告げている。[89] そしてそれを「経済の徹底国家化」（Durchstaatlichung der Wirtschaft）と「国家権力の経済化」（Verwirtschaftlichung der Staatsgewalt）という観点から説明し，相対的安定期における社会民主々義の政治的賃金論や政治的価格論を多少先取りした議論を展開している。[90] なおこの時期におけるレンナーの「国家資本主義」論は，相対的安定期における彼の組織された資本主義論のアウトラインを示したものだと考えることができよう。

さて戦時中ヒルファディングは，組織された資本主義にかんする具体的な理論展開をおこなっているわけではない。むしろ戦後の一展望として，つぎのように二者択一の問題においてその可能性をのべているにすぎない。すなわち組織された資本主義か社会主義か？と。この二者択一は1916年3月の論文「ドイツ労働運動の将来をめぐって」において，つぎのように表現されている。

「この闘争においてまずブルジョア世界の生存問題が決定されるであろう。銀行とカルテル支配の金融資本の時代から，異常に強化された支配者の国家権力をともなう，組織された階級的に構成された国家資本主義の時代に発展するか，これが社会の社会主義的組織とそれにふさわしい民主主義的行政組織に交代するかの問題である。[91]」（傍点は隔字体）

1916年12月に発表された連続論文「商業政策上の諸問題」の結びの部分では，これは戦後の社会発展における三つの展望という形でのべられている。

(1) 戦争が長びくにつれてその可能性は薄れるが，戦後においても諸階級の政治的社会的力関係が根本的に変化しない場合，階級的に構成された，組織された資本主義が出現する。

(2) 戦後の政治的社会闘争が，最終目標を達成するまでにいかないにしても，内外政治の民主化を実施し，民主主義社会を実現する。国内では労働者階級が大幅な経済的譲歩を獲得する。国際的には，帝国主義的闘争にかわって，後進地域をその支配下におく資本主義的諸列強の政治的経済的協業がもたらされる。

(3) 戦争が「社会的政治的騒擾の一時代」をもたらし，プロレタリアートは政治的権力を掌握し，長期的な発展において無階級社会を実現する。[92)]

この間におけるヒルファディングの見解の微妙な変化は，おらそくつぎのような事情から説明されるであろう。すなわち最初ヒルファディングは，戦争が短期間に終り，異常に強化された国家権力が戦後も存続するかもしれぬと考えて，支配者の国家を頂点とした組織された資本主義の現実的可能性を唱えたように思われる。しかし戦争が長びくにつれて，国家権力の基盤がゆるぎだし，大衆がその疲弊から不満をしだいに増大させる傾向がみられるようになった。このような傾向を考慮してヒルファディングは，戦争が長びくにつれて，支配者の国家を頂点とする組織された資本主義よりも，民主国家を頂点とした組織された資本主義の可能性の方が大きくなるだろうと考えるにいたったようである。かくてヒルファディングは，戦後の社会発展を，はじめの二者択一から三つの道において展望するようになったわけである。

ところでヒルファディングが戦時中に社会主義か組織された資本主義か，といった二者択一の問題を提起するにいたった理由は，彼の帝国主義論の性格に深く根ざしているといってよい。すなわち彼の帝国主義論には資本主義の腐朽と寄生性の規定がなく，したがって資本主義が爛熟し死滅しつつあるという理解がないのである。そして帝国主義政策さえ抑制すれば，金融資本を中心とした資本主義の組織化傾向の進展とともに，矛盾が緩和され，失業，恐慌そして貧困化が減少するような将来の展望を示す理論構造を一面ではもっていたのである。これは第一に，戦時中の崩壊論批判において露呈したわけだが，彼の均衡論および景気循環論的な観点における資本蓄積の歴史的発展の展望に由来している。第二に，生産関係における変化というよりは，資

本主義の組織化の問題として，独占と金融資本を取り扱う『金融資本論』の欠陥をその原因としている。

資本主義の腐朽と寄生性の問題においてヒルファディングがホブソンよりも後退したとレーニンが指摘したのは，おそらくヒルファディングの帝国主義論の，超帝国主義や組織された資本主義に結びつくような理論構造を強く意識したからだろうと考えられる。ブハーリンは，ヒルファディングの独占と金融資本にかんする規定を継承して，組織された資本主義論を唱えた。それにたいしてレーニンは，帝国主義における独占の位置と性格についてはじめて正しい規定をあたえ，五つの基本標識からなる彼独自の帝国主義論を築き上げたのである。*

* 資本主義の計画的組織体制への転換や生産の無政府性の止揚をとくヒルファディングやブハーリンの「独占」論にたいして，周知のように，レーニンはつぎのような独占にかんする見解を示した。

すなわち独占とは，生産の集積の特定段階において生じたものであり，資本主義，商品生産，競争という一般的環境との絶えまない，活路のない矛盾のうちにあるものである。

なおブハーリンの「独占」論とレーニンの「独占」論の相違は，1919年3月のロシア共産党（ボ）第8回大会[93]における彼らの綱領草案をめぐる対立によって，現実に浮かびあがることになる。

83) 加藤栄一『ワイマール体制の経済構造』東大出版会，1973，85～99ページによる。
84) ブハーリン（註34）98ページ。
85) ヒルファディング（註44）(2)341ページ。
86) 同上(2)105ページ。
87) Hilferding, (Anm. 4) S. 322.
88) Hilferding, Organisationsmacht und Staatsgewalt, in : NZ., 32. Jg. Bd. 2, 1913/14, S. 154.
89) Karl Renner, Probleme des Marxismus (1), in : der Kampf, 9. Jg. 1916, S. 160.
90) a. a. O., (3) S. 229～239. レンナーのこの連続論文は，*Marxismus, Krieg und Internationale*, Stuttgart, 1917. において，若干の加筆訂正のうえ，収録されている。なおこの著書については，服部英太郎『ドイツ社会政策史（上）』著作集Ⅰ，未来社，1967，44～46ページを参照。

91) Hilferding, (Anm. 2) S. 172.
92) Hilferding, (Anm. 37) S. 245～246.
93) これについては，森杲「相対的安定期の分析視角――（その1）コミンテルンの世界経済論(1)」（北大『経済学研究』24(1) 1974. 3）24～27ページを参照。

結びにかえて

大戦下におけるヒルファディングの帝国主義認識は，かくて，帝国主義か自由貿易主義か，組織された資本主義（超帝国主義）か社会主義かの二者択一に帰結した。そしてそれは，資本主義の腐朽と寄生性を無視するような彼の帝国主義論の理論構造に由来するものであった。ここでは，結びにかえて，戦後革命および相対的安定期におけるヒルファディングの政治的理論的諸活動を展望する意味で，戦時中の彼による社会主義運動の見とおしについて，本論を補足しつつのべておきたい。

ヒルファデイングは，上述のような彼の帝国主義論の性格から，金融資本の時代を社会主義の前段階と規定する場合にも，資本家階級と労働者階級の力関係にかたよった形で社会変革の展望をあたえている。彼は大戦前夜の階級関係を，中間階級をあいだにはさんでの，資本家階級と労働者階級の勢力の均衡状態といったふうに理解していた。この均衡状態を，帝国主義の諸矛盾が破壊してゆき，社会革命への道を切り拓いてゆく。かくてヒルファディングは『金融資本論』において，組織された資本主義への歴史的発展傾向を一方では示しつつも，他方では物価騰貴，租税負担そして戦争の危険といった帝国主義的諸矛盾の激化の結果として，組織された資本主義にいたる以前にプロレタリアートが政治権力を掌握し，社会変革を成就するのを期待したといってよい。

ところが，戦争の勃発とともに，社会主義運動の日和見主義化と分裂が生ずる一方，国家権力の異常な強化と経済の組織化がもたらされた。ヒルファディングは資本家階級に有利な方向に力関係が変化したとみて，社会主義の勝利にかわって組織された資本主義が出現する現実的可能性を考えるにいた

った。そして社会主義か組織された資本主義か，といった二者択一において戦後の社会発展を展望したわけである。これは，戦時中におけるヒルファディングのマルクス主義中央派的態度，すなわち勝者も敗者もない講和協定の締結をめざした平和主義的態度と密接な関係をもっていたといえる。

ローザ・ルクセンブルクら急進的左派は，帝国主義＝崩壊論の観点から，帝国主義における経済的，文化的，道徳的崩壊か社会主義か，という選択を掲げ，直接的に社会主義をめざした反戦運動を指導したのである。彼らによると第三の中間的な道は決してないのだが，この第三の道を歩んだのが，まさしくマルクス主義中央派であったといってよい。ヒルファディングがマルクス主義中央派としてのこの道を，好むと好まざるにかかわらず歩んだのは，生産の無政府性を止揚し，恐慌，失業，貧困化傾向を緩和した資本主義の未来像を描いてみせた彼の資本主義発達史観からすれば，けだし当然であったといえる。

さて，ヒルファディングは，このようなマルクス主義中央派の立場から，どんな戦後における社会主義運動の見とおしをたてたのだろうか。この問題を考察するに際しては，カウツキーとヒルファディングの相違を明白にすることが重要である。

カウツキーは戦争による経済の疲弊をみて，戦争負債の負担をプロレタリアートが負うべきでないとして，戦後における社会主義政権樹立の企てを延期するように提唱した。[94)]

それにたいしてヒルファディングは，前述の二者択一にたちながらも，戦争が結局非常に激しい闘争，社会変革の時代をもたらすであろうとのべている。戦争は,「資本主義にとってもはや解決不可能な社会的内政的問題を……その遺産として残す（経済的崩壊でないことに注意――引用者)」。通常の課税方法ではもはや解決不可能な財政負担，通商関係の不確実化，物価上昇傾向のいちじるしい激化をもたらす。戦争が生み出すこのような客観的諸条件の変化は，労働者の階級的自覚をうながし，その資本主義への体制順応傾向を解放闘争にとってかえる。そして社会発展がどのような道筋をたどるかは，

プロレタリアートが戦後に占める地位と闘争能力のいかんにかかっているのである。[95]

ヒルファディングは，戦時中には平和主義的政策を掲げながら，このように戦後における階級の力関係の推移にすべてを期待するような社会変革の展望を描いたのである。ヒルファディングとカウツキーのこの相違は，多少彼らの歴史観の違いに根ざしたものだと考えられるが，戦後ドイツの社会化運動にたいする彼らの対応の仕方の相違に結びついてゆく。すなわち，カウツキーが社会化運動に消極的だったのにたいして，ヒルファデイングは「社会主義的経済制度のみが恐ろしい戦争から受けた傷を治癒しうる」[96]とのべて，社会化運動を積極的に指導していったのである。

ヒルファディングは，ドイツ革命の当初，前述の社会主義か組織された資本主義かの二者択一について，社会主義の方に判定が下されたと考えた。そして，彼なりに社会主義の実現にむかって努力した。だが革命の敗北は，彼をしてふたたびかの二者択一を思いださせる。かくてヒルファディングは，組織された資本主義への道を歩きはじめるのである。

94) カウツキーがこのような見解をのべたのはつぎの理由からである。
資本主義の崩壊にではなく，プロレタリアートの勝利にマルクスは社会主義の実現を期待した。それは資本主義が生み出す生産諸力の巨大な発展の基盤のうえに達成されるわけだが，過渡期経済においてはこの物質的諸条件が欠乏し，さらには戦争のもたらした尨大な負債が上積みされている。社会主義政府はこの負債をかかえこむことになり，したがって少しも貧困を止揚しえないから，戦時経済から平時経済の過渡期には，プロレタリアートは政権奪取をこころみるのではなく，現存の生産諸力の計画的利用に協力しなければならない(Kautsky, *Sozialdemokratisce Bemerkungen zur Übergangswirtschaft*, Leipzig 1918, S. 163)

95) Hilferding, (Anm. 2) S. 171～172.

96) Hilferding, Revolutionäre Vertrauen!, in : Die Freiheit, Jg. 1, Nr. 6, 18. 11. 1918, MA